

今年も、受難節(レント)に入りました。復活祭(イースター)までの約40日間の始まりです。宮きよめ、逮捕、裁判、十字架、イエス様の姿を辿りながら、信仰を深めていきましょう。

人間の憤り

いつも優しい人が、ひどく怒ると、周りとはとてもびっくりします。でも、いつも不機嫌な人が怒っても、また腹を立てているくらいにしか思いません。慣れとは恐ろしいものです。宮きよめの場面では、イエス様の激しい姿ばかりが心に残りますが、祭司長たち、律法学者たちも、腹を立てている様子を見逃せません。彼らには何が不満だったのでしょうか。

丁寧に読むと、彼らはイエス様の行動自体に怒ったのでは無いようです。それは、彼ら自身にも、本来の神殿の目的を逸脱して、金儲けしているという、後ろめたい気持ちはどこかにあったからでしょう。良心がうずいたから、とも言えるでしょう。そうではなく、彼らが腹を立てたのは、病人の癒しと、障がい者たちの喜び、そして、子どもたちの讚美が聞こえてきた時でした。イエス様が称賛された時、彼らは我慢できなくなってしまったのですそれは、自分たちの権威が脅かされている、と恐れを感じたからでした。

怒りは、人間に必要な感情です。それは、危険から身を守るための手段でもありますが、大変大きなエネルギーで、周囲をコントロールします。もし、祭司長や律法学者たちのように、自分が周りにどう思われているか、という恐れから怒るなら、それは正しい働きを、妨げることになりかねません。むしろ反省して、自らの行動を改めることが最善です。もし、イエス様も怒られたのだから！と不機嫌を撒き散らすようなことがあれば、それはこの聖書の箇所を、都合よく利用しているだけで、祭司長たちと同じになってしまいます。

神殿の破壊行為？

では、愛に満ちた優しいイエス様らしからぬ、暴力行為・営業妨害には、どう目を向けたら良いのでしょうか。聖書には時々、ここは理解できない、という箇所があります。でも実は、そこに本当の真実や正義が、証しされているのです。昭和のちゃぶ台返しは、頑固親父が悪い、とネガティブなイメージがあります。もちろん、人間ですからそうなのですが、丁寧に考察すれば、父親の孤独や過重な責任、理不尽さなど、その時代に渦巻いていた本当の罪を、暴いているということも、できるかもしれません。

イエス様が追い出されたのは、両替人だけではなく、その客となって買い物していた人をも、追い出されました。そして、後に逮捕され裁判にかけられた時、「彼は神殿を破壊する者だ」と雇われた偽りの証人に弾劾されたのは、この事件も念頭にあったでしょう。

イエス様が、ここで示された唯一のことは「祈りの家で金儲けをするな」というメッセージでした。宮きよめは、2回行われたと考えられますが、一度では改善されない、人間の罪深さが浮き彫りにされているようです。前衛ミュージカル「ジーザス・クライスト・スーパースター」の演出では、神殿で戦争兵器まで売り買いする男たちに、イエスが激昂するようになっていきます。その解釈はゆき過ぎですが、21世紀に至るまで、キリスト教も含め、祈りの宮である信仰が、時に権力に利用され、時に商売に利用され、時に戦争に利用されたことを思う時、あながち、その比喩も全くの的外れではないのかなと思わされます。

イエス様の怒りは、礼拝を守るための行動でした。教会は、祈りの宮であるのでしょうか。受難節に、自らを顧みるように、鋭く問われています。目をそむけずに祈りましょう。